

## 柏崎市米山町旗持山のミヤコイヌワラビ

登坂 裕一

2001年8月16日、柏崎市米山町旗持山山麓でミヤコイヌワラビを発見した。新潟県で過去に記録されたことのないシダである。同年10月21日には、地元柏崎在住で植物研究されている田村孝雄氏とともに、枯死せず展葉中であることを確認。田村氏はその際、生品研究用に自宅へ1株持ち帰られた。田村氏からは、12月18日付の書信で「11月に葉を落としました」と報告があった。

ミヤコイヌワラビ生育地は旗持山山麓、南西向きのなだらかな小谷、スギ林下の平坦地。10株ほどが、リョウメンシダ、アイアスカイノデ、ヤマイヌワラビ、ミゾシダなどを交えて生えていた。作業用の小道脇、5、6畳程度のごく狭い範囲にあるのだが、毎年草刈りがなされ、はっきりした株数がわからない。写真の個体は2004年8月28日、草刈りされなかった残りの株である。

発見から3年間、新潟県では水害・地震などがあり、生育地近くの斜面で小規模な地滑りも起こったが、ミヤコイヌワラビは今のところ健在である。日本の分布北限地であり、今後の盛衰に注目したい。

ミヤコイヌワラビは、ホソバイヌワラビに近縁な暖地性シダである。1936年田川基二氏が新種として記載し、近江比叡山のもをtype標本に定めている。

『日本のシダ植物図鑑第6巻』（倉田・中池 1990）によれば、分布の北限は栃木県栗山村湯西川温泉〔川治-3〕（1960年採）、日本海側では石川県山中町九谷千束川〔大聖寺-2〕（1982年採）であり、新潟の隣接5県にはいずれも未記録である。同図鑑には「全体の姿、小羽軸上に顕著なトゲを持つことはホソバイヌワラビに似るが、小羽片はほぼ左右同形をしており、羽軸の裏側がほぼ無毛」と説明されている。見慣れると野外でも両種の識別はそう困難でないが、注意を払わないと本種をホソバイヌワラビと誤認する可能性は大きい。

『新潟県の羊歯植物誌』（牧野恭次 2000）でトガリバイヌワラビとされている標本写真も、小羽片の形を改めて見直すとミヤコイヌワラビである可能性を捨てきれない。牧野氏の標本は現在、長岡市立科学博物館に所蔵されており、機会があれば確認してみたい。同植物誌には、トガリバイヌワラビの県内分布として新津市朝日、古津、割町、加茂市青海神社等とされており、もしその証拠標本がミヤコイヌワラビならば、そこが国内北限地となる。

### 付記

旗持山（ハタモチヤマ）という山名は地元での呼称。国土地理院2万5千分の1地形図「柿崎」では城山（366.0m）と示されている。山頂まで2本の登山道が開かれており、よく整備された米山町ルートとやや悪路の上輪ルートがある。山頂にはワラビが群生し、旗持山と記された看板もある。ミヤコイヌワラビは登山ルートからかなり離れたところにある。

### 文献

- 倉田悟・中池敏之（1990）日本のシダ植物図鑑第6巻：480  
 倉田悟・中池敏之（1997）日本のシダ植物図鑑第8巻：23  
 牧野恭次（2000）新潟県の羊歯植物誌：110



写真 ミヤコイヌワラビ Aug. 28, 2004